「ご褒美をあげなくっちゃね」

もう片側に近づいてきた男がそう言って、竿に挿された飾り串に手をかける。

抜いてもらえる、と期待したが、そうではなかった。

「ひぃ…っ♡♡ひぃいい……ッ！♡♡♡」

男は細い串の先をつまむと、じゅぽじゅぽとそれを上下させはじめた。

「あ…ッ♡♡あひ…ッ♡ひぃいい……ッ！♡♡」

「おぉ……、すっごい声出るね」

面白がるように抜き挿しを速められ、尿道が灼けつく感覚に、腰が小刻みに上擦(うわず)る。

（やめ……っやめてぇ……っっ！！）

狭い場所をほじくり返される異様な感覚に恐怖しながら、孔内からも気をそらすことができない。漏らしてはいけないと強く思った結果、下半身のみを男たちに見せつけるように、烈(はげ)しくくねらせてしまう。

「あぁ…ッ♡あぁあぁ……っっ♡♡」

恰好の見せ物だとばかりに男たちの視線が集中して、紅潮した顔にさらに熱がのぼる。耳まで赤く染めながらも、しかし今は恥ずかしさに構っている場合ではない。
じゅぽじゅぽと無遠慮に隘路(あいろ)を犯されるたび、ただ熱いとばかり感じていたそこが、奇妙な疼きにみまわれはじめたのだ。

「あ…っ♡な……なに……っこれ……ぇ…っ♡」

尿道内からも孔と同じような、ぞわぞわとした痺れが生まれている。容赦なく上下に串を動かされるたび、痺れは狭い道でどんどん掻き立てられていった。

「ひぃ…ッ！♡♡あ…ッ！♡あぁあ…ッんっ！！♡♡」

尿道をほじられるたび、失禁時に似た感覚が湧きおこる。
失禁といえば、ついさっきあまりの快感に尿を漏らしたばかりだから、こんなに早く次の小用が足したくなるわけはない。
けれど狭い孔をじゅぽじゅぽ突かれるたび、確実に何かが漏れそうな、切迫した疼きが幼茎全体に疾(はし)る。

「んぅ…っ♡♡あッ♡あぁ……っ！♡♡」

少年の尿道内に残った液を纏い、抜き挿しはヌルヌルと滑(すべ)りのよいものになって、いっそう速さを増している。
失禁感と同時に、やはり孔に教え込まされたのと似た疼きが尿道を支配していくようでもあり、恥骨からぞくぞくと突き抜けるこの感覚が、未知の感覚による恐れなのか、快感なのか、自分でもよくわからなくなる。

「ほら、進まなくていいの？」

「ん″ぅ″ッ！♡♡」

前にばかり気をとられていると、背後からむにっと両の尻たぶを掴まれる。
そのままそれぞれの丸みを円をえがくように揉まれ、そうされながら菊門がより紐に食い込むよう尻をおさえつけられる。

「ひぁ…っ♡♡あぁあ…っ！♡」

揉まれることで菊門の形は逐一(ちくいち)形を変え、そこを閉じたままにするのに苦労する。
双球を両外側にむけて開くように揉まれた瞬間、窄まりは横長に拡げられ、外気に晒されてひくひくッと痙攣する。